

ミケル・デ・クレルクの集合住宅デザインと都市の文脈との関係

—ロッテルダム派 (J. J. P. アウト) との比較を通じて—

The relationship between Michel de Klerk's design in Housing development and urban context
Through comparison with the Rotterdam school (J. J. P. Oud)

大坪 明 武庫川女子大学 特任教授

Ohtsubo Akira

Designated Professor,
Mukogawa Women's University

概要

英国に端を発した産業革命が19世紀後半からオランダでも興り、20世紀初頭にかけて、人口が集中した都市部では著しい住宅不足が発生した。それに対して1902年の住宅法の施行以降には、政府の補助金を受けた自治体や非営利の住宅協会等により、良質な住宅が供給された。その当時の住宅設計者の中に、アムステルダム派の建築家ミケル・デ・クレルク (Michel de klerk) が居た。クレルクは建築家の社会的使命として、労働者に芸術的環境を提供することで、彼らが自意識と自尊心を取り戻すことを望んだ建築家だった。クレルク設計の建築を、ロッテルダム派の例えばJ.J.P.アウト (J.J.P.Oud) の設計した団地と比べると、クレルクのデザインの特徴が見えてくる。クレルク設計の住宅街区においては、周辺の都市文脈や環境と関連したデザインがなされた。それにより、地域と当該の住宅街区との様々な関係性が想起され、多様な意味を読み取ることができて、クレルクが入念に文脈上の呼応を設計の中に織り込んでいたことが判る。その結果、クレルクの建物が人々の心を動かすものとなった点がロッテルダム派との違いでもあった。

Summary

During the last half of the 19th century, industrial revolution had been developed also in Holland. Around the turn of the century, severe housing shortage had occurred in large cities where a lot of people had moved to. To cope with this situation, the Housing Act had put into operation in 1902. After that, good and affordable housing were supplied by the subsidized local governments and housing associations. One of the architects who designed these housings was Michel de Klerk of Amsterdam School. He wished as a social mission of the architects that workers regained self-consciousness and pride by providing the artistic housing for them. In comparison with the housing estates designed by him and J.J.P. Oud of Rotterdam School, the characteristics of Klerk's design become clear. It is that he designed the housing estates to correspond the surrounding urban context. So, the relationship in the area and the housing estate was called to mind. He had designed housing estates in this method. These characteristics in his design caused impressions and also thanks to the architect in people's mind, and it was the difference from the Rotterdam School.

1. 研究の目的と方法

オランダは17世紀に東方貿易で繁栄したが、18世紀から19世紀初頭にはそれに陰りが見えて来ていた。しかし19世紀後半に産業革命の到来等で再び繁栄を取り戻し、アムステルダムやロッテルダム等の大都市で人口が急増した。その結果、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、それらの都市は欧州の諸大都市と同様に住宅不足に直面し、移住した技能のない貧困な労働者層は、環境が劣悪な住宅に住むことを余儀なくされた。政府は1902年に住宅法を施行して一定の住宅基準を制定して、人口1万人以上の都市に都市拡張計画の策定を義務付け、更に非営利住宅の建設主に政府の補助金の受給資格を与えた¹⁾。その結果、都市拡張計画地区等で自治体や住宅協会等により良質な労働者住宅が建設された。それらの住宅の設計者としては、ロッテルダムではデ・スティール (De Stijl) の創設に加わり、オランダのモダニズム建築を牽引したJ.J.P.アウトが、市の建築家に就任し住宅建設を担当した。一方、アムステルダムではミケル・デ・クレルクという表現主義的傾向を持つユニークな建築家がいくつかの住宅団地を設計した。クレルクについては、我が国ではまだ研究が十分とは言えない。本論では、J.J.P.アウト設計の住宅団地と比較する中で、クレルク設計の団地が、都市の文脈や何らかのメタファーと呼応していた状況を考察し、クレルクが設計した建築の意義の一端を明らかにする。

2. 建築家J. J. P. アウトとロッテルダム派

J.J.P.アウトは若い一時期ミュンヘンの進歩的建築家T. フィッシャー (Theodor Fischer) の下で働いていた。アウトはその後、芸術の革新を目指すファン・ドゥースブルフ (T. van Doesburg), P. モンドリアン (Piet Mondrian), T. リートフェルト (Gerrit T. Rietveld) 等の芸術家や建築家達と知り合い、1917年に雑誌デ・スティール (De Stijl) の発刊と同グループの結成に参加したが、1921年にはそれから離脱した。デ・スティールの人々はロッテルダム派とも呼ばれ、芸術の「本質」として「構成」を重視し、それを見る人の印象が表現の全てだと考えた。しかし純粋な意味でのデ・スティールの建築は、リートフェルトのシュレーダー邸のみである。アウトはむしろ同グループの抽象論を離れ、機能主義に傾いていった。アウトは1918年にロッテルダム市の都市計画家兼建築家に就任して同市の住宅建設にモダニズム建築の設計で尽力し、また、シュツットガルトのヴァイセンホフ団地 (Weißenhof Siedlung, 1927年) での住棟の設計に最年少で参加した。

キーワード：アムステルダム派, ミケル・デ・クレルク, 集合住宅, デザイン, 都市の文脈

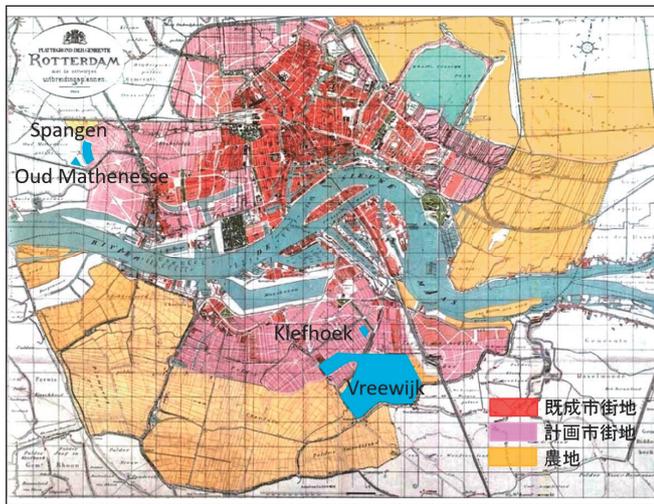


図1 1903年のデ・ヨングのロッテルダム拡張計画と団地位置（青色）

2-1 スパンヘン地区 (Spangen, 1918~1920年)

当地区は、デ・ヨング (De Jong) の1903年の拡張計画 (図1参照) の西端に位置する。アウトは、ロッテルダム市の建築家に就任した直後に、当地区の集合住宅の設計を担当し、同地区のI・V・VIII・IX街区での設計に携わった (図2参照)。その中で、1919年にはM.ブリンクマン (Michiel Brinkman) 設計の、立体街路を持つことで有名な街区に隣接するVIII街区の設計をした。このVIII街区では、東半分の民間業者が建設した傾斜屋根を持つ煉瓦造の既存住棟と、アウトが設計する西半分の陸屋根を用いた市営住宅 (図2の濃い灰色部分) の住棟との間のデザインの齟齬を調整するために、相互が接する短辺部分の住棟に、民間住棟側の傾斜屋根及び煉瓦造の仕上げを部分的に採用した折衷的設計 (図3参照) を用いた。この点は、少なくとも一体となる隣接住棟のデザインの文脈を意識した処置であったと推察される。

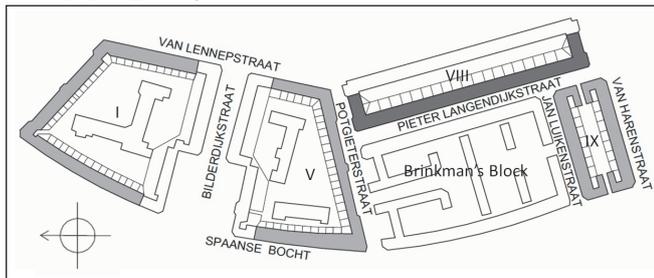


図2 スパンヘンでのアウト設計の住棟配置図 (濃灰色がVIII街区)

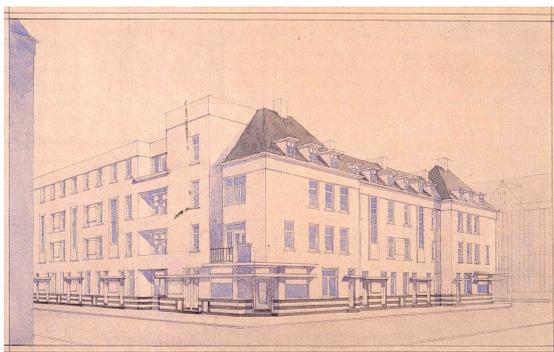


図3 スパンヘンVIII街区の短辺部分の傾斜屋根を部分的に用いた処理

2-2 アウト・マテネッセ半恒久住宅 (Oud Mathenesse Semi-permanent housing - Witte Dorp, 1922-23年)

アウト・マテネッセの住宅団地はヴィッテ・ドルプとも呼ばれ、前述したロッテルダム市拡張計画の西端スパンヘン地区の更に西に位置する、アウト・マテネッセ干拓地の市街地拡張計画地区内にJ.J.P.アウトの設計で建設された (図4参照)。当団地の敷地形状は二等辺三角形で、建設当時の写真 (図5参照) では計画地の直ぐ南の元堤防 (Zeedijk) の外にはまだ水がある状態で、周囲は未開発の状況であったことがよく判る。当住宅団地は存続期間が25年と限定されて建設された。平屋に屋根裏部屋が付いた住戸を主体として、ごく一部に2階建て住戸が配置されていた。住棟は傾斜屋根を持つが、平屋ないし2階建ての矩形主屋の立方体の上に、外壁より少し内側ないしは正に外壁の位置に屋根が乗っていた。従って下の立方体の形状が際立ち、傾斜屋根を持ちつつモダニズムの純粹形態を表現することに成功しており、それ以前の伝統的な傾斜屋根を持つ住棟の形態とは一線を画した造形処理がなされた。

二等辺三角形の敷地での配置計画は、厳格に幾何学に則ったものであった (図6参照)。基本的には外周に沿って住棟4列と道路2本が平行に配置され、各頂点付近だけが辺側から導入される道路を通すために変形配置が採用されている。中央広場に向かう道路とあいまって、求心性の高い配置計画となっている。その他、道路のT字交差部分には、小広場が設けられた。建設当時は周囲が未開発だったこともあるが、しかし幾何学の原則が貫徹されていて、周囲の状況や歴史が配置計画やデザイン等で考慮された様子は見受けられない。



図4 アウト・マテネッセ干拓地の拡張計画とヴィッテ・ドルプの位置



図5 建設当初の航空写真 (左上の旧堤防が先の干拓地には水が残る)

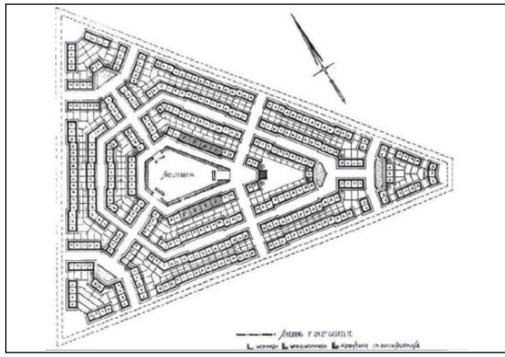


図6 ヴィッテ・ドルプの配置図



図8 鋭角のコーナーに店舗が入る住棟

2-3 キーフフーク団地 (Kiefhoek, 1925-29年)

アウト設計の当団地は、オランダのモダニズム建築の代表例として示されることも多い。ロッテルダムでは元々マース川の北側に市街地が展開していたが、次第にマース川を越えた南も開発された。前述の拡張計画の範囲を外れた南の田園地帯に、図1に見る様に既に1916-19年にフレエヴェイク田園村落 (Tuindorp Vreewijk) が建設されていた。その北側にあたるブルームホフ地区で、街路沿道に既に煉瓦造の一般的建物が建つ台形状の街区の内部に当団地は建設され (図7参照)、外周道路と当団地との接点は極めて少ない。低所得労働者のための当団地は、2階建て298戸で構成され、他に若干の店舗と教会があった。造形的には白い立方体の「新しい建築 (Nieuwe Bouwen)」により全てが構成されている (図8参照)。

配置は、基本的に長辺方向に平行に住棟が並び、長辺方向の通りから当団地に導入される動線では、それに沿って住棟が並び (図9参照)。団地が外周の通りに口を開けている部分に、コミュニティ施設としての教会と小広場 (緑地) が設けられた点は、周辺コミュニティと接続する機能面での配慮だと推察される。しかし緑地は別として、コミュニティ施設として重要な教会は、周辺の煉瓦造で傾斜屋根 (一部は陸屋根) の伝統的街区の中で、極めて自己主張の強い白い立方体で (図10参照)、形態やデザインないしは素材面での周辺との乖離は著しい。実は、当団地の建物は予算が無かったため、コンクリートではなく煉瓦造で、白モルタルが塗られた。(ル・コルビュジェのサヴォア邸も、壁は煉瓦造でモルタル仕上げである)。外部との接点であるこの教会は、彼の初期のスパンヘンVIII街区の住棟と異なり、周辺の文脈の継承をあえて拒否したとも推察される。



図9 キーフフーク配置図



図10 キーフフークの教会

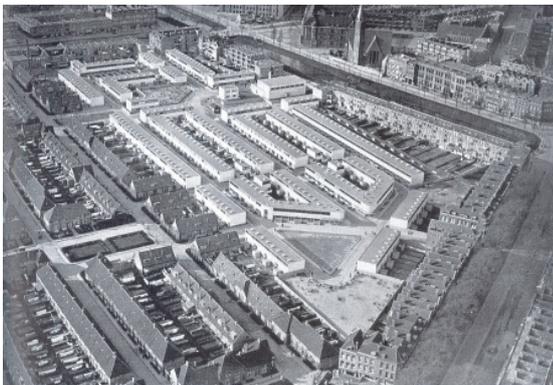


図7 キーフフーク団地鳥瞰写真

3. 建築家ミケル・デ・クレルク (Michel de Klerk, 1884~1923年) とアムステルダム派

前述のように20世紀初頭のオランダにおいて、アムステルダム派と言われる表現主義の建築スタイルを採用する一派の主要メンバーの一人にM. クレルクが居た。しかしクレルクは39歳になったその日に、その才能を惜しまれつつ夭折した。その短い生涯の中でクレルクは、いくつかの労働者の集合住宅の設計を手がけていた。クレルクの名を有名にした作品には、アムステルダムのスパールンダマー地区 (Spaarn-dammerbuurt) にあるエイヘン・ハールト (Eigen Haard) 住宅協会の集合住宅「ヘット・シップ (Het Schip)」や、アムステルダム南部拡張計画地区内で、ピエト・クラマー (Piet Kramer) と共同で設計したデ・ダヘラート (De Dageraad) 住宅協会の、通称「デ・ダヘラート」などである。これらの集合住宅は、合理主義的なモダニズム建築を標榜する「ロッテルダム派」等の人々から、その意匠の豊穡さ故に「労働者の宮殿」であるとか、あるいは曲線や曲面の多用故に「クリームのような建築」などと揶揄され、更にはそのデザインの恣意性やプランニングの非合理性も指摘されていた²⁾ことも事実であった。

3-1 スパールンダマー地区 (Spaarndammerbuurt)

アムステルダムはエイ河やノルドゼー運河で、その北側のザーンダム等の地区と分けられ、港湾・物流機能は、エイ河やノルドゼー運河沿いに立地している(図2参照)。スパールンダマー地区は19世紀後半に、アムステルダム駅の北西部でエイ河に面して新設された港の労働者の居住区とするために、港の背後に開発された地区で、アムステルダム駅から北西方向に向かうオランダ鉄道の線路敷を挟み、南はヴェストパーク南辺の運河と北はS102通りの間の領域である(図11参照)。住宅街区は概ね5階建ての集合住宅で構成されている。同地区内の道路配置と鉄道線路とは平行でなく、その間に角度が生じたために、線路際に三角形の敷地がいくつも出来ていた。アムステルダム中央駅の前から線路に沿って東に向かい、ヴェストパーク東端の道路を南から鉄道線路を越え、スパールンダマー通りに入った直ぐ左にもやはり三角形の敷地(図11中のA)があり、そこに同地区のシンボルでもあったマグダラのマリア教会が建っていた。同教会は1891年に建設されたが、老朽化で1968年に解体された。当地区の鉄道より北の中央近くに、スパールンダマープラントスーン広場(Spaarndammerplantsoen, 図11のB)があり、同広場の周囲にクレルクが設計した集合住宅が3棟建っている(図14参照)。更に同地区内の集合住宅ヘット・シップ(図11中のC)の北側には、ヴァレンキャンプ(H. J. M. Walenkamp)の設計した集合住宅街区のザーンホフ(Zaanhof)(図11中のD)が立地している。



図11 スパールンダマー地区の地図

3-2 スパールンダマー地区のシンボル=マグダラのマリア教会 (De Maria Magdalena-kerk, 1893)³⁾

この教会は、アムステルダム中央駅も設計したP.カイペルス(P.J.H. Cuypers)の設計で、クレルクは彼の学生でもあった。当教会の敷地は、底辺が短く高さが高い二等辺三角形の敷地だったので、内陣に向かう軸に対称の平面計画が原則だった教会で、内陣及びその周囲の放射状祭室を配置し、かつ、翼廊の長さを確保するためには、必然的に幅のある底辺を内陣側、二等辺三角形の頂点を入口側とせざるを得ない。建築家は、身

廊及び側廊として利用できる空間を可能な限り確保するために、翼廊が附属する矩形の主空間に、狭い正面からより広い内陣側に向けて広がる三角形平面の空間を加えることで処理をした(図12左)。また、バジリカ形式の教会では、通常は正面脇に塔が設けられるのだが、正面側にはその余地が無いので、同教会では従来の塔の位置に代え、身廊と側廊の交差部に大きな正方形平面の尖塔が設けられた。同教会は、その立面図(図12右)や写真(図13)を見ると解るように、ゴシック様式が採用されており、中央の大尖塔だけでなく、中央塔の周囲や正面入口脇に小尖塔(ピナクル)が設けられている。これらの尖塔群は、正に地区のシンボルであったと推察される。

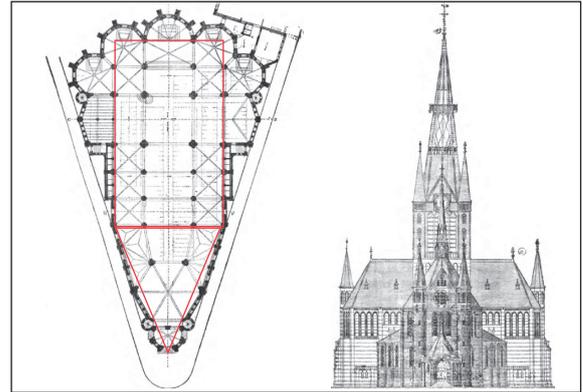


図12 マグダラのマリア教会の平面図, 立面図.



図13 マグダラのマリア教会写真(1930年)

3-3 スパールンダマープラントスーン広場

3-1でも述べた様に、スパールンダマー地区の鉄道以北の中央を通るスパールンダマー通りと鉄道線路とのほぼ中央に位置するスパールンダマープラントスーン広場は(図11中のB)、煉瓦で出来た街区に囲まれた中に緑のオアシスを提供している。同広場を囲むデ・クレルクが設計した住棟を図14に示す。同広場に面して、クレルクが当地区で最初に設計した広場北側の住棟は、若い野心的事業家クラス・ヒレのために1913~1915年に建設された。更にクレルクは、広場の南側で独特の立面を持った二番目の住棟を住宅協会エイヘン・ハールトのために設計し、これは1915~1918年に建設された。最後に、クレルクは1917年に、三番目の住棟を同じくエイヘン・ハールト住宅協会のために設計し、これはその住棟形状からヘット・シップ(Het Schip, 船)と呼ばれた(図15~17参照)。

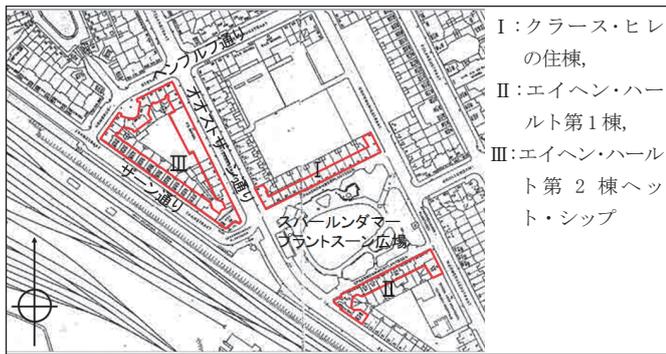


図 14 スパールンダマープラントスーン広場周辺のクレルク設計の建物

3-4 ヘット・シップ (Het Schip, 1917-20 年)

ザーン通り、ヘンブルフ通りとオオストザーン通りで囲まれた三角形の敷地に建つ当団地は、住宅 102 戸、集会所と広場に面する郵便局（現在はヘット・シップ博物館）及び当団地の建設前からそこに在った幼稚園で構成された中庭囲み型の街区を形成している。当住棟の豊穡なデザイン（図 15, 20）は、伝統的な公共住宅と比べると、様々に施された芸術作品やそれが表象するものが、後に引用する住民の言葉に見るように、労働者の意識に働きかけることが意図されていた。



図 15 ヘット・シップ外観（郵便局から南を臨む）

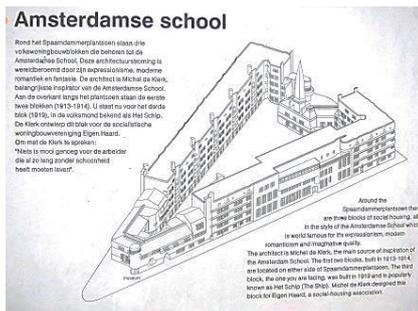


図 16 外観アイソメ図



図 17 住棟角の紡錘形突出



図 18 線路側から見た透視図

スパールンダマープラントスーン広場に向けたこのヘット・シップの先端には前述の郵便局が位置し、そこは黒い傾斜屋根を持つ低層部になっている。確かに住棟全体の平面や立面からは客船に見えなくもない。しかし、線路側から描かれた透視図（図 18）を見ると、黒い傾斜屋根を持つ低層部は線路を力強く走る機関車に、高層部と低層部の間の中間の高さの部分は運転席、高層部はそれに引かれる客車を想定したともとれる。港に近いので船のアナロジーという解釈も判るが、線路に隣接した立地からは、列車のアナロジーでもおかしくは無い。側面に開けられた半楕円形の窓は車輪の、高層棟の水平線に分節された窓は列車の窓のアナロジーと言う推察も成立しそうである。

ザーン通りとヘンブルフ通りのコーナーの紡錘形の突出部（図 17）は、両通りの立面を接続するとともにアイキャッチャーの役割を果たしている。ヘンブルフ通りに沿う部分の中央には、ファサードを後退させ、建物高さも低く抑えた小広場が設けられ、これに面する中央の屋根の上に、この建物を有名にした尖塔が建っている（図 19 参照）。この尖塔については、本田は次のような解釈をしている⁴⁾。

（前略）M. デ・クレルク（de Klerk）によるエイヘン・ハールト（Eigen Haard）集合住宅の有名な塔は、アウトの阿姆斯特ダム派批判にとっての格好的であったと思われる。この塔は、複数の意味において象徴的存在であった。一つには、居住者である労働者の誇りえる紋章として、そして恐らくは、阿姆斯特ダム派の記念碑として輝き続けていた。しかしこの塔は、なんら建築的機能を持たず、入ることすらできないものであった。象徴たらんことを運命づけられた唯一の機能として保持していたに過ぎない。言わば、象徴のための象徴として存在していたのであった。ここで問題なのが、その形態が労働者用住宅の象徴としての必然性を持ち得ていなかったことである。確かに、結果としてその塔は居住者にとって欠くことのできないものとなったのかもしれない。しかし、本来そこに存在する必然性は何らなかったと言べきかもしれず、極端なことを言えば、その建物が宮殿であったとしても、その塔は宮殿にとっての象徴となり得たことだろう。（後略）

しかしこの尖塔は、本田の言うように単に象徴としてここに置かれたのではなく、より広い都市文脈の中で存在意義を持ったはずである。そこで思い至るのが、数ブロック南で同じ様な三角形の敷地に位置した、3-2 で述べたマグダラのマリア教会の尖塔との対比である。師匠が設計した、地域の精神的中心だった同教会に敬意を払い、その尖塔に対比させて中庭側からも多くの住人の視界に入る様にこの位置に置いた。その象徴性はマグダラのマリア教会との関係において、当住宅街区の重要性を主張していると推察できる。この尖塔の下部が祈祷所なら最適だが、残念ながら現実的は一般住戸である。更に、その尖塔を持つ同小広場の位置は、向かいに 1 年前に H.J.M. ヴァレンカンプが設計したザーンホフの出入り口（図 14, 20 参照）の

動線を受ける関係が作られている。つまりこの広場に建つ尖塔と小広場は、マグダラのマリア教会、ヘット・シッフそしてザーンホフという、この地区の重要な街区を関係付けている。

また当住棟には、随所に彫刻家ヒルド・クロップ (Hildo Krop) の浮き彫り彫刻が施されている (図 21 参照)。この様な具体的造形物による表象は、どれも住民達に分かり易い寓意が込められている。例えば鳥は郵便を利用した迅速なコミュニケーションを示していると推察される。



図 19 尖塔を持つ小広場



図 20 図 18 の小広場と対面するザーンホフ入口



図 21 ヘット・シッフの彫刻の事例 (左から射手, ペリカン, 風車)

このヘット・シッフでは、住民がクレルクの早い死を以下のように残念がった点⁶⁾は、印象的である。

(前略) 私たちの家を建てたその人は逝ってしまいました。私たち労働者の妻たちは、彼が私たちの夫や子どもたちのためにしてくれたことで、この不屈の働き手にどれだけの感謝ができるでしょうか。疲れた一日の後、純粋な楽しみと家庭の幸せのために建てられた家に帰ることは、実に光栄ではないでしょうか。一つ一つの石が呼びかけてはきませんか：全ての労働者の皆さん、皆さんの家に来て休んで

ください。それは特に皆さんのために建てられたのですから、と。スパーランダマー広場は子どもの頃に夢見たおとぎ話の様ではありませんか。何故なら、当時それは在りもしなかったのですから。でも、デ・クレルクさんは、もし長生きさえしていれば、きっと私たちの子どもたちにもこの夢を実現しようと努力してくれることでしょう。(後略)

3-5 南部拡張計画 (Plan Zuid)

1902 年住宅法の規定により、アムステルダムでも都市拡張計画が作成された。同市では、北、西、南、南東の其々に拡張計画が作成され (図 22 参照)、南部は H.P.ベルラーヘ (H.P. Berlage) が担当し、中層集合住宅を中心に街区が形成された。

ベルラーヘが、最初にアムステルダム南部拡張計画を提出したのは 1904 年であった。その計画案は、単調な建物が続くデ・ペイブ住区に相対するものとして、低密度で緑化された市街地が計画されて、高価な土地に多くの戸建住宅を配置したものであったので、市議会の承認が得られなかった。1915 年に作成されたその第 2 案 (図 23) は、最初の案と根本的に異なった。第 2 案では緑地帯が配されてはいたが、整然と列を成す中層住棟を主体とした新市街地が計画されていた。そこでは、ベルラーヘが興味を持っていた「通りや広場に面する建築」により、統一的に街区が構成されていた。1917 年 10 月に、新しい計画案は市議会により承認された⁶⁾。

現在トゥエーデ・ファン・デア・ヘルスト通り、ルツマ通り、ファン・ヴァウ通り、そしてアムステル運河で囲まれた部分 (図 23 中の赤枠内、詳しくは図 24 表示の範囲) には、ベルラーヘのこの 1915 年の拡張計画案では病院 (ACADEMIE ZIEKENHUIS) が配置される予定だった。しかし 1918 年に市によって、アムステル運河の北側の同領域の建設敷地が 6 つの住宅協会に譲渡されて、この内の中央部分がデ・ダヘラート住宅協会に配分された⁷⁾。



A:北部, B:西部, C:南部, D:南東部, E:スパーランダマー地区

図 22 アムステルダム拡張計画 (1915 年)

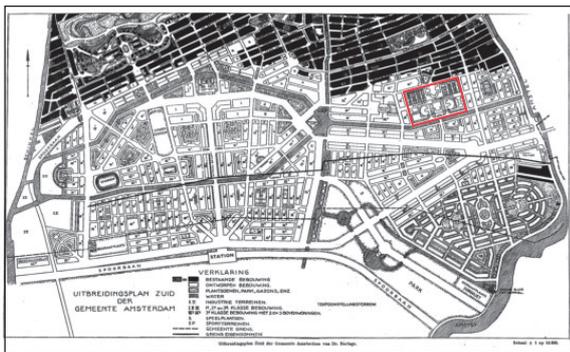


図 23 H. P. ベルラーへの南部拡張計画面案 (1915 年)

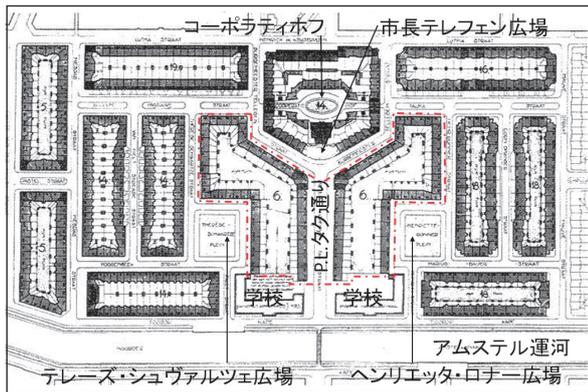


図 24 デ・ダヘラート (赤枠内) 及び周辺街区の配置

3-6 デ・ダヘラート (De Dageraad)

デ・ダヘラートに配分された敷地は全体で 12ha の広さで、ヘンリエッタ・ロナー広場とテレーズ・シュヴァルツェ広場に挟まれてアムステル運河に面する位置にある (図 24 参照)。デ・ダヘラート住宅協会は自治体と協議し、割り当てられた領域で 294 戸の建設を引き受け、その実現のために 1918 年にアムステルダム派の建築家、ミケル・デ・クレルクとピエト・クラマーに設計を依頼した。ミケル・デ・クレルクは前述の労働者住宅「ヘット・シップ」のデザインで有名になり、そして労働者に自らを高める自意識を与える建築家と考えられていた。その点は 3-4 で引用した、ある労働者の妻がクレルクの死後にその死を悼んで書いた一文からも読み取ることができる。

デ・ダヘラートの配置は図 24 に見るように Y 字形で、P.L. タク通りが中心軸を成す。同通りは、その突き当たりのコーポラティーフにある、市長テレフェンのモニュメントが置かれた市長テレフェン広場で分岐し、市長テレフェン通りとなる。P.L. タク通りの両側にあるアムステル運河沿いの学校の校舎 (1923~1924 年、設計 A.J. ウェスターマン) が、同運河を渡り当団地へ入る入り口を形成する。その学校の背後から始まる住棟はクレルクの設計で、通りの両側の建物は波状に高さが変わる壁面が連続し、通り沿いは平面的に 2 戸単位で壁が微妙にずらされて (図 26 下, 27 参照) 出入りする建築線と、屋根の高さの変化 (図 25, 26 下参照) が相まって分節され、リズムカルに躍動するような立面を持つ。

市長テレフェン広場に面する P.L. タク通り両側の、コーナー部の壮大な曲線の塔を持つ住棟は (図 28 参照)、P. クラマーが



図 25 P. L. タク通り両側の住棟

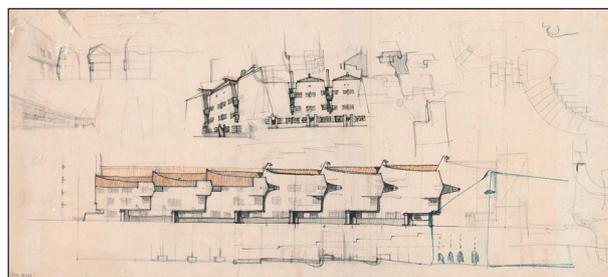


図 26 クレルクのスケッチ (部分, 上: 広場側, 下: P. L. タク通り側)

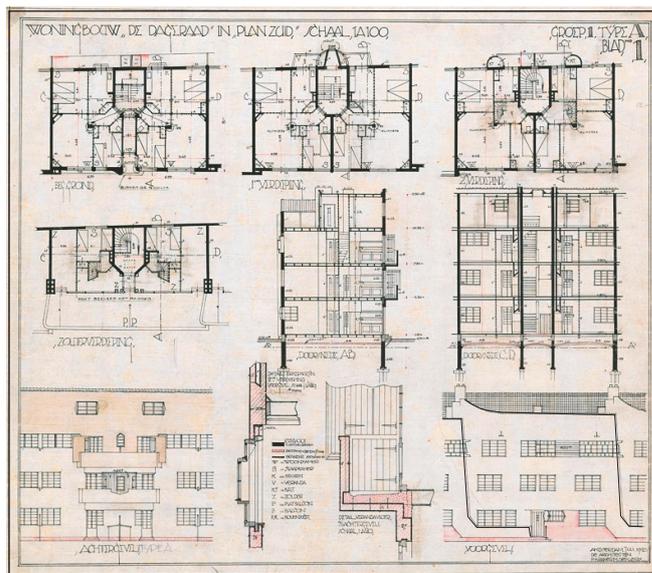


図 27 P. L. タク通り住棟平面図・立面図・断面図



図 28 コーナー部の曲面を多用した塔を持つ住棟 (1 階店舗)

設計し、当街区を代表する部分として世間に知られている。クラマーはこの建物を、黄色煉瓦を用いて角が丸い目立つ建物にした。発散する波の間に湾曲する塔があり、その箇所がデ・ダヘラートを有名にしている。このうねる様な意匠が横溢するスタイルにより、アムステルダム派はしばしば蔑んで「クリームのような建築」²⁾と呼ばれた。クラマーが設計した市長テレフェン通り沿いの住棟は、P.L.タク通りの住棟をほぼ踏襲している。

P.L.タク通り沿いの住棟を越えた両側にある、ヘンリエッタ・ロンナー広場 (Henriëtte Ronnerplein) 及びテレーズ・シュヴァルツェ広場 (Thérèse Schwartzplein) 側の住棟も、ミケル・デ・クレルクの設計である。P.L.タク通りと市長テレフェン通りでは、歩く人の視点が移動するので躍動感を与えられているのに対し、この広場側は主に滞在する場所として、静かな印象が重視された。住棟は、6戸単位で其々に屋根を持つ4つの棟に外観上は分節され、農村的な気安さが醸し出されている(図26上, 29参照)。分節された各棟の台形のファサードは、彼が1911年にアムステルダム南郊の田園の中の集落アイトホールン (Uithoorn) に設計した住宅の透視図(図30参照)に、外形が酷似している(実際に建った建物では屋根の高さが抑えられた)。田園地帯の心安らかな生活に、この4つに分節された住棟のイメージが重ねられたのではないかと推察する傍証である。分節された各棟の間からは煙突が静かに整然と立ち上がり、分節が更に強調されている。



図29 広場側の住棟写真

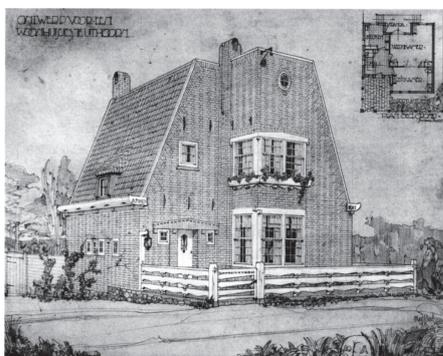


図30 クレルクが1911年にアイトホールンに設計した住宅透視図

この1層2戸×3層=6住戸で1棟と見立てた、同一住棟が4棟ある様に見える集合・分節手法について、D. グリーンバ

ーグ (Donald I. Grinberg) は次のように述べている⁸⁾。

(前略) 多分彼の思いは広場にあり、通り側にはなかったもので、また煙突と勾配屋根が村的のメタファーを示唆するという一層ロマンティックな想いを早い段階でデ・クレルクが持っていたからであろう。デ・クレルクが、デルフトのアフネータ・パルクあるいはエンクハウゼンのスノウク・ファン・ローゼンと同様に、六戸の住戸を一つの集団と考え、この各集団を接続されたヴィラと解釈することを意図して、明らかにスケールの拡大が生じた。(後略)

集約や分節は建物のスケール感を調整するために設計者が一般的に用いる手法である。従って、「ヴィラ」という表現は別として、「スケール感を間違わせる」と言う意味では、この指摘は正しい。しかし本田は、この建物における集約・分節に関してスケールの拡大と言う点で以下のような指摘をしている⁹⁾。

(前略) アムステルダム派を特徴づけている一面である幻想性によって生み出される幻覚とでも言うべき効果は、必ずしもアウトの目に好ましく映らなかったのではないだろうか。(中略) ここでは、一住戸が一住戸としての存在を主張するのではなく、かといって規則的な反復における個の埋没によって社会的平等性なるものが表現されているわけでもなかった。デ・クレルクは六戸の住戸を一単位とすることによって規模を拡大し、独立住宅とでも言うべき外観を装わせた。そこには、労働者住宅に誤った品位を与えようとした意図が存在した。このようなファサードにおける不自然な分節は、労働者住宅であるという事実を隠蔽するものであり、当然アウトにとってこのような表現が、真の労働者階級の価値を表徴する、真のモニュメンタルな表現とはなり得なかったことは明らかである。(後略)

これはしかし、グリーンバーグの言う「ヴィラ」という言葉に触発されてか、この「集合・分節」がヴィラ(邸宅)風の住宅規模であり、また階により窓の位置や大きさが異なることに関して、労働者住宅であるという真実あるいは平等性を表現していないという反発を表明している様に思える。グリーンバーグが例示したアフネータ・パルク (Agneta Park, 1882-84) では、4戸を1つ屋根の下に田の字型に集めて1棟にする(図31参照)手法が用いられた。これは仏のミュールーズ (Mulhouse) で19世紀半ばから建設された労働者団地 (cité ouvrière) で開発された、小住戸を集合することで壁を共有し合理的に建設する手法であり、例えばクルップ (Krupp) 団地のクローネンベルグ (Kronenberg, 1872-74年) など、他の様々な労働者団地でも採用されていた。アフネータ・パルクをはじめ各地で小規模住宅をこの様に集合させた理由は、住宅を大きく見せようとしたというより、コスト削減の意味が大きかったと推察される。またクレルクにとってもこの建築表現は、邸宅のアナロジーと言うよりは、筆者が指摘したように田園の中に建つ住居のアナロジーとして、田園的で安楽な雰囲気をか

の広場側に漂わせる意図が大きかったのだと考えられる。更に、6戸単位の分節及び各階の窓の位置や大きさの違いは、P.L.タク通り側でも見られることで、広場側をことさら邸宅風に見せる意図があったとは、必ずしも言えないと考えられる。

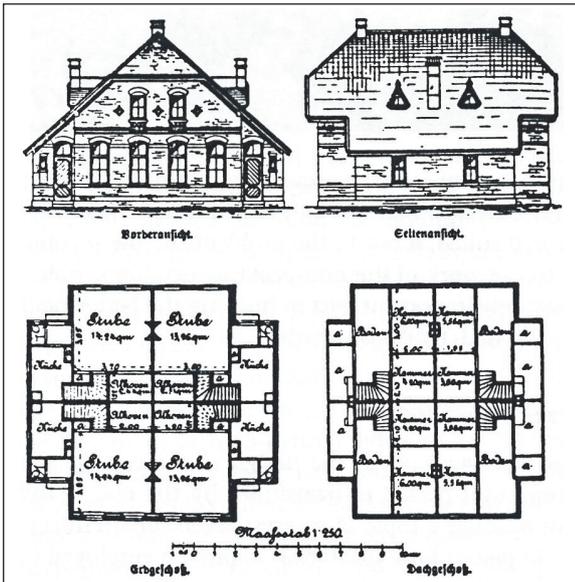


図31 アフネータ・パークの住戸平面・立面図

この「デ・ダヘラート」を見ると、細部意匠へのこだわりが強いことが解る。1974年に当建築の住棟全体は、卓越した建築の質に基づき国定史跡に指定された。これらのアムステルダム派の集合住宅は、次節に述べるような批判が寄せられたが、しかし、例えそうであったとしても、当時の居住者にとっては、おそらくそれらの住宅は「誇るべき我が家」であったに違いないと思われる。

4. ロッテルダム派とアムステルダム派

モダニズム運動の信奉者の建築家達にとっては、アムステルダム派は歴史的な「意匠や建築の作法」に対して十分には反発をしてはおらず、デ・ダヘラートは住民を犠牲にして芸術的エゴを発散させたものに過ぎない様に思えた。平面計画は機能的でなく、窓は小さすぎ、また洗濯物を干す場所さえ考えられていないと、ロッテルダム派はモダニズムの視点から、クレルク等の集合住宅のデザインの恣意性や非合理性を批判していた。本田はその点に関して、以下のように述べている¹⁰⁾。

(前略) アムステルダム派の作品に見られる個人の才能に玩ばれる建築表現、あるいは、そういった建築家の姿勢に対して、デ・スティールグループの人々が建築的個人主義という印象を持ったであろうことは想像(原文は創造)に難くない。(後略)

それらの批判は、「新しい建築(Nieuwe Bouwen)」の正当性を主張するためには、意味を持ったと推察される。アムステルダム派からロッテルダム派への逆の批判は余り聞かないが、両者の対比を建築史家ケネス・フランプトンは建築家メンデル

ゾーンの言を引いて以下のように記述している¹¹⁾。

(前略) その時メンデルゾーンは、「ウェンディンヘン」サークルの作品を見るつもりであった。彼はアムステルダム滞在中、当時、工事中であった表現主義的集合住宅を幾つも見回った。それらは、ベルラーヘによるアムステルダム・サウス地区計画の一環であり、その中には、ミヘル・デ・クラークの集合住宅《アイヘン・ハールト》(1913~19年)やピート・クラメル《デ・ダヘラート》(1918~23年)なども含まれていた。これらの集合住宅は、装飾煉瓦やタイル煉瓦などで仕上げられていたが、ウェイトフェルトを指導者とする「土着」志向派の建築家が、きわめて彫塑的で土俗の傾向に熱中しているのに比べると、二人の作品は遥かに構造的考えを示していた。(中略) メンデルゾーンは、夫人に宛てた手紙の中で(中略) 次のように説明している。「分析的なロッテルダムは空想性を拒む。一方、空想的なアムステルダムは客観性が理解できない。いずれにせよ、機能が基本的要素であることは確かだ。だが、感性を欠いた機能なんて、ただの箱作りじゃないか。僕は、これまでよりもますます両者の間を行く計画を立てるだろう。[...] ロッテルダムは単なる箱作を続けるだろう。なにしろ恐ろしく冷たい気質だからね。一方、アムステルダムは自分自身の運動の炎で燃え尽きてしまうだろう。機能・プラス・力動性、これは挑戦だ。」(後略)

アムステルダム派の建築に関しては、モダニズムの建築家達からの批判があったにも関わらず、20世紀初頭の早くから、建築家が労働者住宅の設計に参加し、そしてそれらを芸術的に扱った点を評価する人も居た。例えば、以下のような記述¹²⁾が確認できる。

(前略) アムステルダム派の集合住宅は、建築家が住宅建設に参加したこと、そして可能な限り労働者住宅を芸術的に扱いたいと思う結果のデザイン過剰の傾向を、いくつかの点で顕彰するものだった。このことの意義は、ベルギーの建築家フイブ・ホスト(Huib Hoste)により認識されていた。(後略)

5. 結論

前述のように労働者住宅の設計に建築家に参加したのは、早くは19世紀の中頃からのことだった。英国では1840年代から建築家ヘンリー・ロバーツ(Henry Roberts)が、労働者階級環境改善協会(Society for Improving the Condition of the Labouring Class=SICLC)で住宅改善や良好な住宅の建設に取り組んだことは、ハウジングが建築家の仕事となる嚆矢だったと考えられる。また例えばドイツのエッセンにおいて、クルップ社が供給した従業員住宅団地に関しても、1890年代から同社の建築部署の長となったロバート・シュモール(Robert Schmohl)が、アルフレッズホフ(Alfredshof)やアルテンホフ(Altenhof)等で、労働者や退職者・傷病者の生活に敬意を

払い、十分に美を意識した住宅設計を行っていた。もっとも、労働者住宅を美的に扱う点に関しては、ロッテルダム派もデザインに関して手を抜いていたわけでは決してなかった。

むしろ、筆者がここで強調したいのは、都市や周辺の文脈がどの様に設計の中に入り込まれ、またそれがどの様な影響を人々の心に与えているかということである。J.J.P.アウトの設計は、スパンヘンの街区は別として、アウト・マテネッセ団地やキーフフーク団地では、建築形態やデザインに関して、周辺の都市文脈を読んで呼応するという態度は見かけられなかった。それに比較すると、クレルクの2団地に関しては、配置、住棟形状、立面、あるいは住棟に施された彫刻などのどれをとっても、周辺の文脈を読んで、あるいは何かのメタファーとして、それに呼応する関係の構築が明らかに模索されていた。これは、恐らくロッテルダム派とアムステルダム派其々の特質と関係していたはずである。ロッテルダム派あるいはモダニストは、「新しい建築 (Nieuwe Bouwen)」を実現する上で歴史主義から決別するために、自己の論理を中心として、あくまでその正当性を表現上で主張する必要があった。一方、アムステルダム派は、土着性を志向していた。従ってアムステルダム派にとっては、その建築が置かれる立地とその周囲が持っている文脈やそれらのメタファーは、建築上の極めて重要な要素と考えていた。そして、その土着の文脈が誰にでも解る形で象徴化された時に、そこに居住する人々の心を動かし、更には例えば3-4に引用した労働者の妻の言のように、設計者に対する感謝の念も呼び起こすことができたのだと推察している。

参考文献

- 1) : Donald I. Grinberg, *Housing in the Netherland 1900-1940*, Delft University Press, pp.36-41, 1977
 - 2) : <http://www.architectenweb.nl/aweb/archipedia/archipedia.asp?ID=247> (2010/08)
 - 3) : Dietsche Warande, *Nieuwe reeks 2. Jaargang 6*, pp.118-125, 1893
 - 4) 本田昌昭, *J.J.P.アウトの〈モニュメンタルな〉という概念をめぐる*, 平成4年度日本建築学会近畿支部研究報告集, pp.1019~1020, 1992
 - 5) : Donald I. Grinberg, *Housing in the Netherland 1900-1940*, Delft University Press, p.50, 1977
 - 6) : http://stadsarchief.amsterdam.nl/english/amsterdam_treasures/maps/plan_zuid/index.en.html (2011/08)
 - 7) : <https://www.amsterdam.nl/kunst-cultuur/monumenten/monumenten/gebouwen-gebieden/beschrijvingen-van/p-1-takbuurt/> (2016/07)
 - 8) : Donald I. Grinberg, *Housing in the Netherland 1900-1940*, Delft University Press, p.52, 1977
 - 9) : 本田昌昭, *J.J.P.アウトの〈モニュメンタルな〉という概念をめぐる*, 平成4年度日本建築学会近畿支部研究報告集, p.1020, 1992
 - 10) : Ibid., p.1019
 - 11) : ケネス・フランプトン著, 中村敏男訳, *現代建築史*, 青土社, pp.212-213, 2004年
 - 12) : Donald I. Grinberg, *Housing in the Netherland 1900-1940*, Delft University Press, p.49, 1977
- 図版出典
- 図1 : Noor Mens, W.G. Witteveen en Rotterdam, Uitgeverij 010, 2007に筆者加筆
 - 図2 : <http://www.rotterdamwoont.nl/images/uploads/8aa2d69ae9febfb3742a37b7d881c83.pdf> より筆者作成 (2015/05)
 - 図3 : <https://thechannelhouse.org/2013/04/20/the-practicalities-of-oud/> (2016/08)
 - 図4 : <http://www.rotterdam.nl/DSV/Document/Bestemmingsplannen%20in%20procedure/Delfshaven/Oud%20Mathenesse%20090227%20onherroepelijk.pdf> (2016/08)に筆者加筆
 - 図5 : <http://dehefpublishers.nl/Fondsljst/Het-witte-dorp-oud-mathenesse> (2016/08)
 - 図6 : Donald I. Grinberg, *Housing in the Netherland 1900-1940*, Delft University Press, 1977
 - 図7 : <http://www.nieuws.top010.nl/kiefhoek> (2011/09)
 - 図8,15,16,17,19, 20, 21, 25, 28, 29 : 筆者撮影
 - 図9 : <http://www-5.unipv.it/carlista/download/Oud-Rotterdam-Light.pdf> (2011/09) に筆者加筆
 - 図10 : [https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:Nieuw-Apostolische_Kerk_\(Rotterdam\)#/media/File:Noord-oost_gevel_zijde_Hillevliet_-_Rotterdam_-_20191739_-_RCE.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:Nieuw-Apostolische_Kerk_(Rotterdam)#/media/File:Noord-oost_gevel_zijde_Hillevliet_-_Rotterdam_-_20191739_-_RCE.jpg) (2016/08)
 - 図11 : Google mapに筆者加筆
 - 図12 : Dietsche Warande, *Nieuwe reeks 2. Jaargang 6*, 1893
 - 図13 : <http://www.theobakker.net/weekblad/wk06.html> (2016/08)
 - 図14 : http://www.housingprototypes.org/project?File_No=NETH002 に筆者加筆
 - 図18 : [https://nl.wikipedia.org/wiki/Eigen_Haard_\(woningbouwvereniging\)](https://nl.wikipedia.org/wiki/Eigen_Haard_(woningbouwvereniging)) (2012/10)
 - 図22 : http://www.eff-stichting.nl/pub_vaneesteren_2_3.php (2010/10)に筆者加筆
 - 図23 : https://en.wikipedia.org/wiki/Plan_Zuid#/media/File:H.P._Berlage_Plan_Zuid_1915.jpg (2010/10)に筆者加筆
 - 図24 : <http://www.tipamsterdam.nl/video/de-dageraad/> (2010/10)に筆者加筆
 - 図26 : http://schatkamer.nai.nl/system/pictures/262/original/KLER_803.jpg?1310555799 (2011/03)
 - 図27 : <http://schatkamer.nai.nl/nl/projecten/woningbouw-de-dageraad> (2011/10)
 - 図30 : Manfred Bock, Vincent van Rossem, Kees Somer. *Cornelis van Eesteren, architect, urbanist [volume 1]*. Rotterdam: NAI Publishers, Den Haag: 2001
 - 図31 : Nicholas Bullock, James Read, *The Movement of Housing Reform in Germany and France, 1840-1914*, Cambridge University Press, 2011